



和漢文操卷之三

○行類

△連他互照序

連二三四

或おちしきとておれおとあまらに祖系と文章  
の遺跡ありてはしるの所多く御のおもひ  
きりりし楯の香花じうあはれりしは相の  
今様よとておのれしとあるはれしとておを  
序がよとておしにあらはれしとておを

佐山文庫



危翁の世とよまうし色舞いけ舞白とめたり  
我れの上よりとらり

播のうつらんやほしむと  
時をさうも歌ふやうの相

かくて危翁のうらけくけさとしさし播と  
よふはし情とぬきとそと連歌之能諧と  
し相の時を此古歌とのふてそと能諧之  
連歌といふ二事とさるぬくおめむとかく  
まと言ふの余情といふ連能とより一虚字の  
之照しておこさるぬく此後とまは

こそ我々もくも詞と守時とおよかひもくも  
一て短歌のうけよもさるぬくもあせめちり  
二章と暗記してはらく凡新のばしとあり  
三縁越と詩いおらうく新騒あり聯句あり歌朝  
いそにりてはよて連音あり能諧ありつれも  
たの妻ありし人妻ありて此後のもくもいふ  
けゆへ一連音とそとあまひて情とあり  
かきしをくも能諧と虚とありて此後とあり  
同とおらうくも此後と凡新のほとありん  
よへ減し先後とありよもさるぬくはねあり

一、採集の編書、詠諧之連歌、  
 一、世ノ言篇の詠諧師のほ奥ノ連歌の  
 一、詞の詠諧、  
 一、一、採集の編書、詠諧之連歌、  
 一、世ノ言篇の詠諧師のほ奥ノ連歌の  
 一、詞の詠諧、

一、採集の編書、詠諧之連歌、  
 一、世ノ言篇の詠諧師のほ奥ノ連歌の  
 一、詞の詠諧、  
 一、一、採集の編書、詠諧之連歌、  
 一、世ノ言篇の詠諧師のほ奥ノ連歌の  
 一、詞の詠諧、

心も情も不用にて所合をふ向たり情と  
こゝぬ世の用せしや連音のきかるといふ  
能得の能とまらうくせしや世に弱のまあり幸東  
といふまらぬやとむ其れ連歌と能得と  
いふらわすのえあふとせし世に中きふ  
いふ家まらぬと所とけ所とのまらぬ或を  
連歌と能得と或と能得と連音と能得  
て詩の人の能得和と交るうとくせし  
連音の情のまらぬとあふれらる能得の  
うつりと併て連能一座の所合ありと能得

女舞者三三

のこ世を面くのうに題うて大和の風物のみよ  
せむしうとあし 佛堂の流とほくせし世に  
人知もてたまるくせむの能得とてたまる  
あしとらとせし一能と能得減れの大妻  
うくせしや世に無廢の大とせむとせむ  
人知のあらむとせしやと守ゆり詞とせし  
能得の能よのまらうくと能得はらうと能得  
はらうとせし世の能よの能人よ連音の艶は  
とりてせしやと今つと連能よあはくむとと  
能得とせしやとせむとせむと小町と能得と

女舞者三三

日

うたむいもた菱川う舟をとりつらうとて  
連能のらちうくにきくひい耶那いのみあめ  
と先いふもいさきし連二うてこのあはれ  
てかくとを照の序とさしきりてそのあ  
百世の功とさけあつてそのあつて一世の雲かん  
くよくさきぬあつとさるし一人さし言信の飛信  
とさるさるくとも

惟時享保三のり十月十日和泉の将ふ  
と香と焼て薰誦再あてそのあ

連能歌仙行

校正 珍

う  
うらまにをれあし信達二うはれ  
焼く香ゆくくりしウスマノ羅  
ふ向し手のあれのあ入  
乙由 珍 二 由  
あすいらぬ人もあがりけくして  
乙由 純 二  
あつりりりりり市七宮人あ  
乙由 珍 二  
あぬおや月のああききあはれ  
乙由 珍 二  
あつりりりりり市七宮人あ  
乙由 珍 二

通おらうとていふはあつたはあつた  
けり此<sup>サキ</sup>幸といふと得んま  
年とてたえ後のまも船にうて  
そのひのまは此<sup>サキ</sup>幸といふま  
お膳と申すもあとおをれ入  
まするまも一丸旅のまも  
便船と申すもあとおをれ入  
小見ひあもや汐のりあ  
たもといふまもあとおをれ入  
くく枯よまもあとおをれ入

二 珠 由 純 二 珠 由 純 二 珠 由 純 二 珠 由 純

時あつても君に申すの 秋のお  
お舟と申すもあとおをれ入  
あつたといふまもあとおをれ入  
お膳と申すもあとおをれ入  
まするまも一丸旅のまも  
便船と申すもあとおをれ入  
小見ひあもや汐のりあ  
たもといふまもあとおをれ入  
くく枯よまもあとおをれ入

二 珠 由 純 二 珠 由 純 二 珠 由 純 二 珠 由 純

月を入朝のりぬのあつらひに  
 ちいさききい歸るるまゝ  
 随分のまじりて 橘のり  
 といふもあはれいふはれり  
 塵のしきもあはれに 抱あはれ  
 いちよきあはれゆめ あはれ  
 むやうの暖筆集と云れは 讀まじ  
 といふもあはれいふはれり

珠 二 純 由 二 純 由 二 珠

○作者列傳

正珍、枝木氏ニシテ伊勢ノ山田ニ師範トス連歌  
 ハ里村家ニ通稱セリトソノ壯年ヨリ家産ニ

抱ラス家法ハ建治ノ式目ニ據テカラ凡美ハ家禪ノ方角  
 ニ遊ル一生不羈ノ隱逸人ナリ「光純ハ其内ノ高才ナリ  
 博ク孔内ノ詩書ニ通ヌ姓ハ木林氏ニシテ師儼ラ家ト  
 セリ東堂ハ今ノ俳名ナリトソ乙由ハ同ク山田ノ産ナ  
 當時ニ俳諧ノ名近ナリ音ハ東老坊ニ宿庵席シテ  
 新百韻ノ老ニ遊ヒ中比ハ涼菴存ニ鼓舞舞シテ之足後ノ  
 曲ヲ尺スニ集ハ俳諧ノ變ニシテ祖公羽儀後ノ時世赫ト  
 云ヒ其後中川ノ家ヲ適ヒテ今ハ木林ニ遊リトソ

△俳諧求韻序説 弁短歌行  
 土方以立

眞儀物ニ歌と韻字と用(まゝあり)之十一子



の歌と才と句の孫子と初約と一才又句の孫子と  
孫約と一約とつらつらもさきあふとと也歌とい  
又七歌と才と句の孫子と初約と一才又句の孫子  
と二約と一かくのえく特して約とつらつら短き  
ちくそと短歌とい喜撰式かくい新撰髓腦  
古今集よりかきたると或云詩をりらうのたて  
歌を我國の詞あり句とちありわらもあはれ  
いふちり一短歌ハ賦あり長歌ハ五言の詩  
旋頭二言ハ江南の曲混本二言ハ越調の詩連言  
ハ聯句あり廻又まかくかひくあふとあふと

準ゆり不とあるものありと也言短言也といはれ  
ありて奥儀抄よりわけ存をりあるは他借と求  
韻のゆはあふと遠くと奥儀抄より後とらひ  
近くとたお又濫と假名のつとらふとつとせ  
又や連歌の聯句ありと他借とらふ約とよと  
とつて俳諧と連歌とらふとあつとあつとに  
栢梁其の聯句あれとちあつとに酒折宮の連歌  
ありて漢武帝も日本武もけるの祖とあつとに  
たつとく末韻の式同と奥儀抄も二種の約例  
ありて又句と兼約とあり言詠と細韻とちあつと

麻韻とやまたまの音韻とひ細韻ととハの  
言葉とつよけり歌の束韻とと二行と辨の表不  
ありて短歌とひ長歌とひ雙及本とつよけり  
短歌一唯とと絶句也

雙及本

以六句ヲ互ニ絶トオシ句終字ヲ互ニ初韻ト  
オ六句終字ヲ互ニ終韻ト

あけり此れあけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけりあけり

短歌

以五句ヲ互ニ絶トオシ句終字ヲ互ニ初韻ト  
オ五句終字ヲ互ニ終韻ト

あけりあけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけりあけり

長歌

以三句ヲ互ニ絶トオシ句終字ヲ  
互ニ初韻ト

あけりあけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけりあけり

はれい和候の韻例とあけりあけりあけりあけり  
二初らりあけりあけりあけりあけりあけりあけり  
君不聞のあけりあけりあけりあけりあけりあけり  
のあけりあけりあけりあけりあけりあけりあけり  
四句二韻とあけりあけりあけりあけりあけりあけり

のるも換韻の言は向し同韻とかくわらるるも今  
の論より用ひかゝるよおありとあるも漢家の韻  
例より長篇の言は向し同韻とて歌行のれ換韻  
を用ひるに或は四句一換へ六句一換へ八句十句  
より粗あるも一奥儀の言は向し同韻とて今  
今や和漢の例とす一て和漢の言は向し同韻とて  
此の言の尾字と初韻と一才二才一は向し  
初韻と一六句の言と初韻と一六句の言と初韻と  
換むとある時一次の言は向し他韻と換むとある尾字  
と初韻と一此の言の尾字と初韻と一

はたし漢家の律法も我々の漢和の語句も  
とよりのありて才二才の尾字と初韻と一  
一篇とては向し一韻と用ひるや今や一篇の  
換韻は短歌行とて向し一韻と一歌仙行と六句は  
初韻と一長歌行と八句五韻とあるも一此の言は  
六六も六八も七七も八八も九九も十十も十一も  
十二も十三も十四も十五も十六も十七も十八も  
十九も二十も二十一も二十二も二十三も二十四も  
二十五も二十六も二十七も二十八も二十九も三十も  
三十一も三十二も三十三も三十四も三十五も三十六も  
三十七も三十八も三十九も四十も四十一も四十二も  
四十三も四十四も四十五も四十六も四十七も四十八も  
四十九も五十も五十一も五十二も五十三も五十四も  
五十五も五十六も五十七も五十八も五十九も六十も  
六十一も六十二も六十三も六十四も六十五も六十六も  
六十七も六十八も六十九も七十も七十一も七十二も  
七十三も七十四も七十五も七十六も七十七も七十八も  
七十九も八十も八十一も八十二も八十三も八十四も  
八十五も八十六も八十七も八十八も八十九も九十も  
九十一も九十二も九十三も九十四も九十五も九十六も  
九十七も九十八も九十九も百も

あれ例一ノ葉の韻とありて先仙陽居の二韻  
 とし用ゆらむとかくも求韻の訖らる中其の  
 漢和の不自在ありて句々々に韻字ありや  
 ろんら史記より他語の事語と夫らと談言  
 微中の用とよしと尚もく韻の無細と倫  
 きへ初韻と月七花とのいきへ無韻い加の  
 玉緒玉緒た中よと此とき或と佳利。妙録。はららるのれも  
 他語と村よ音語からふれい更し同字の論と  
 とくじび一なり和漢の初例も同韻一同字  
 と用されい今や他語の韻式もかれといれもの

無細く同字別吟の例といふも余と不ぬ  
 早がのそまき右例の用持と更無もへ或二篇  
 一同韻を用いともまき二韻と論と山山下也  
 右之和漢の恒例なり和歌の古はゆる端より更  
 らと我家の式とらむむと字保を其外のもの  
 黄山老人の駕とらて莫の春と暮秋と此  
 ニとらより短歌行とほらと歌仙行と信と後の人  
 久く濁色ともなり  
 惟時林鐘日滄江  
 歌度壹峯白梅溪乙支榎果主人方以立筆操  
 毫於觀世音寺之獅子窟昇平平云

求韻短歌行

良壺安年

香久山のこらふにわすやそはれ

草もつゝ馬折ウホラリ　もつゝ

蓮二

扇とて霞くむておろそけ

湯あゝあゝたはるる

乙久

雲米を何そと余ふと守あり

草刈の穂は穂のあらし

二

山の端北月まらしくとまら

塵も萩ふく屍のうら

登

二

孫又故入秋とさいさるね老童

た官も又百いきくひて

二峰

言をよみ人のこらふかつりを

ほおろふ船と泳む命ち

登

大坂や中坂と波のまら

ひりりからふと君とあひ

二峰

ひのおれ猫めかろひの

ちられ世やよ岡伽の一桶

登

まらふれとやと調やお脚

深おのるれかろと

二峰

きりてこれに種も水も月此に  
種もばらばらと殿もあつて  
かかろくも言へるものさうとあつて  
前と後とあつて此に  
幕ひてむにうの奥もあつて  
連歌と奪ふ 子あのみと

立 二 文 二 文

○係云は行の連歌之地遣とやいふ持句と地遣の  
佛割と揚めるといふ一篇を合て姫舞の句は七  
とらと席の句はつらと殿の句はつらと懐き  
地遣つらと入席の句はつらと萩の句はつらと殿の

一字とよむとあつて一と一と錯綜して連歌の裁入  
と例とよむとあつて一と一と表の言根とあつて一と  
物倒の絶妙と称して一と一と今も一と一と行  
とらと一と一と裁断あり方皇のつらと地遣  
の求韻と一と一と百世の温觸と一と一と一と  
此式の物結して一と一と一と一と一と一と一と  
二句まの項とあつて一と一と一と一と一と一と  
是かくあるとあつて一と一と一と一と一と一と  
ありむと一と一と一と一と一と一と一と一と  
寄意と一と一と一と一と一と一と一と一と  
中一と一と一と一と一と一と一と一と一と  
ちらと一と一と一と一と一と一と一と一と

八景集

名残しつり七句同じ素春と出でて老人の卒句と  
らしきものもや老木よむまてりよは向のむありむら  
忌をいも削りまうりて終句のむと再進まきま  
敏捷の姿と我家の替身かゝる連歌とせし連歌  
と奪ふよし似たりと今かく求韻の自在とゆふ  
て千歳の孔子も少くせんまむ頓挫と能談の  
そ地あれい削の虚実とあせりしを減く北行此  
大膽ちり評者も一擧とせしよお前もくく削の果  
そそ也作者と越の石動<sup>イヌ</sup>は位もつれし和漢の  
惜まうりて利和室の削り喚び拙子岩の之仙  
とよも地と文掃の選場とて慧く庵記し  
まのれありとめくも記し互見をて

求韻歌仙行

川乙由

ゆひ秋のるく二海とむまふふか  
赤瓦山よまき夏のまむらぬ  
竹衣いそ青の園とやうらかげて  
一巾のふぬと草司こねらるる  
むてふらるるのまらまらか  
ねの本此岸のまらと持ちくらり  
打ちのらるるまらまらゆり

兔土  
蓮二  
表如  
土由  
如由  
二如

蓮うわげく喉あけいげき甚弱い  
凍く布中とあつる南のつん  
嵐うわげく喉あけいげき甚弱い  
馬子よ作はめありあつる  
わくきた北丘危ともう浦を  
南のつん月い月とあつる  
有印もせも心のみよ一雨に  
むさう坊よ粘活の指あへ  
獲すこれ言くお指よ一取き  
うまのちとら北えい下川

士由二如由士如二士由

二  
羹形くつよをけを喉あけい  
地をよあきくをわを危傷  
起るおまよ馬子の目れうつり  
おまのわを危南天よよ  
耳よとちきおの豆座あつる  
便をくつよを敷のせんきく  
はせちせし筆のよまういほ  
牡丹よあれはほのり葉えまけ  
入れのよ本とほのりはつゆを  
冠をのり喉あけいげき甚弱い

如二士由二如由士如二



好色も二字兼字のきよの月  
 みあつてつと挑灯のあけ  
 子編の香も思ふ代も秋の  
 無のりも丁北のり  
 柳原の園てもかまるとまにま  
 いそく心と雪隠てある  
 花のけ年書とてに狼藉り  
 りと心まのいそくり尾

如二士由二如由士

○孫云け行と挑燈之連歌くふ一一篇のま  
 七縦八横一言詠の曲節とていそくり尾

越向とがうて當句の作人とかうていそくり  
 撰集の用あけ挑燈も例の藝晴あれいそく  
 ちもとをばねの心もてせよ力あはる向の暮春  
 暮秋の如きとをらわうて行の一字と次方の新と  
 去れりし十論のる辨も證を了れりし余を  
 當句の如きといふ所合のいそくりいそくりの媚  
 とあうて例もま作の如きと移と一作者  
 いそくも伊勢の各士ありて由とま林嘉道  
 て連能行も一傳あり免ま成子ありてま  
 あみ小席の忌むる位なり義教上園の弟のふま  
 ありしを表如と結城ありて蓮二と同袍  
 のよとて括いて凡物一倍といふむと忘るの如き

双六行

華貴人

けせとつちの物伏見 ころろ平家 ころろの團入 ころろあり  
 折りけ垣のやの巻ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 人の信んと ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 そあやころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 きのみゆねころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 のゆころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 てきころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ

四十 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
何作 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
伏見 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 帳ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 の色ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
四二 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
馬鹿 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
原 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
四仕 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
之達 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
三三 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
三三 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ  
三三 ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ ころろ

きんちやまのひある。朝のほやんまろくく嘆きり又秋の  
むしんくともあぢちりきり

○註曰大和トハ双六ノ石立ナリ本双六ハ三野向ニ石ヲ五ツ立  
置テ十五ノ石ノ早ク入ル方ヲ勝トス大和ハ敵陣ノ地ニ石  
ニツ残シ其ニテ我陣ノ外五地ニ立テ敵ノ六先ヲ留シトシ  
我陣ノ五地ヲ作トス勝負ニ陸速ノ遠アリトフ。鷲鷲十町  
モのろくともあぢちりきりニツレハスルモこれの内を  
ゆくきく▲源氏空蟬ニ軒端萩ト其春ヲ打テ月美ノ時  
ノ詞ニとよひとあぢちりきりトトモニツレハスルモこれの内を  
さぬいよめゆけくもきりきりきりきりきりきりきり

●長恨歌 梨花一枝春帶雨トハ美人ノ愁ニ染ラズナリ

梨ト典トノ假訓ヲ稱スシ○空蟬卷ノ引号ニいよめゆけ  
ゆけこのおとをハハなと九ツ中と十六とあぢちりきり  
向ハ前ニ二十年ノ郷音ヨリ四十ト余所トノ訓ヲ假ニ  
ラ鎖詞ノ絶妙ト稱スシ○新波女のセトのまぢを此  
まのすきと一おめゆけくもきりきりきりきりきり  
ノ遊チヲ請出シテ今ノ依見ニ住セケン河竹ハ例ニ節ノ鎖  
ナリ ▲明皇雜録皇典貴妃録戯將北惟重四可轉  
上連呼号散子轉成四上悦賜四排云重之重四ニ朱  
字ヲ用ルハ此時ノ賜色トフ按スルニ芙蓉以下ニ四所重圍  
ハ總テ長恨歌ノ裁入ナリ其下ニ見合スレ但シ草露ニ玉ト結  
ヒテ魂魄不返ト云ル裁断自由ヲ稱スシ ▲まのよトハ  
和名ノ詞ナリまろくはまけきハ兩用ナリ ▲馬鹿原ハ



我名と例の華表人よゆつらるとりてい文鑑  
可歳行のこもく遺稿よむれのみ事しこなく物各  
と題きりけり先解し十名のも一あり

△大和聯句序 並歌仙行

渡白狂

詩歌者夫凡雅之花而所謂詩變而為  
騷騷變而為詞皆可歌身則詩與歌者  
從音訓之違永詩了則只作若永歌了  
則只訓歷總者道之優游而遊俗談笑  
語共不忘意之凡雅之謂也乎左在則

其詩有聯句而其歌有連系事者從詩  
歌之独有面白麼我云人云聯其時之  
意也則可弗諸越之人與大和之人為  
物語詩歌矣耶初社月夜兮花且兮見  
給侍人之心心而知召賢敷愚也事矣  
貫之之詞麼為此意矣手抑系聯句之  
始則或曰上則唐虞之賡歌下則漢武  
之柏梁共或曰聯句古無此法自韓愈  
孟郊始共或曰諸公已有聯句之詩謂  
自韓愈始者非也共於茲思聯句之濫

觸則如蘓瞻與蘓由之應對或者四言  
或者六言五言七言者勿論而為言合  
上與下則漢曰聯句居和曰連歌歷古  
集之證文麼教多也左有厚纂為成一  
卷物者但可謂自韓孟始尔哉左有  
如園雞納涼者連續一題之意而或者  
成百韻成五十韻言則謂兩吟之詩矣  
其後我朝如江心策度者觀前起後而  
為似今之連俳共譬則如以秋月對山  
堂以梅花對荊棘唯合十二門之各同

而物無體用之差別者字行義暗許之  
黑豆而謂詩歌無娑情之論矣夫先師  
大昔所遊洛之相國寺日有一聯之名  
對鳳兮桐倒掛章知客蝶也妻在周白龍子  
此一對者膾炙其世而稱倒掛與在周  
之意對止乎遺稿魚書二倒掛トハ東坡ヤ詩ニ出テ厚ニ似  
掛ル故ニ各トセリトウ在周ハ齊物論ニ蝶トハ蝶ト云ル  
也ト云ル然ハ在周ハ即蝶トナリ妻トハ妻ト云ル胡蝶ト云ル  
例ニ右語ノ裁入ナリハ對ハ五山ノ會合聯句ニ座多子近  
附アクミシラハ對ヨリ各ヲ稱ヤセテ妻蝶子ト云リトウ  
從是江西湖南之間念遺聯句之名譽  
與所白龍子與者先師之聯句名也其

後之祿之始也。至在武江之區，蕉庵而  
 素堂與故翁夜話，之次撰之。日月日記  
 述往古評漢和之為不自在當時論聯  
 句之為不吟味而其夜試有一聯之隔  
 對。唐土有芳野櫻，將妬海棠。素堂揚州  
 無伏見，桃被惡山薑。白龍子。○遺稿，魚書。此一  
 聯，大和聯句，僅  
 觴。予以此啟古今集，他諸歌摘于唐土，芳野ト云ヘリ本  
 ヲリ聯句ノ結構ハ和漢ノ兩用ヲ通スキヲ及ニソ山薑ハ本州  
 ニ出テ白木ノ名ナリ揚州ノ產物ニテ柳絮ヲ忌ム物ナリトフ  
 然ルニ此對ノ初ハ前ハ唐揚州國名ヨリ土州ノ地形ヲ對シ地トテ  
 少海薑常ノ一名ニ用テ附ケタル也等ヲ意對トモ字對トモ是ルテ  
 定規ト共大和聯句ノ鑑トシトフ彼記ハ漢和ヲ論談セリ  
 如斯者我家建詩聯句之一格而和漢

可通假名真名之用為也。率哉謂大和  
 聯句者其樣似鳳城之五言聯而全用  
 我朝之俗談，居其言字。羅山之七字城  
 而爾亦不為者也。其意如何也。則聯句  
 者本出詩之變律而對其字其字之姿  
 了共不運其題其題之情，譬則如以牛  
 對僧，以松對鶴，句對字對者不及言意  
 對知聯句之作不作，了哉然則月亦者  
 有日星之體而花亦者有枝葉之用，則  
 倭如玉璫與系柳，漫如山色與水光，在

可以鳥之聲對梅之香了則介部隨類  
而為附分重毛其助可謂聯句之註  
用犀哉于然對十二行字耳則從乾  
坤時候之二行不及器賦食服之差別  
態藝虛複者似直名而無形而矣今也  
我家之所建者每句每字分姿情之品  
而逐一定附方之法譬則以古風對新  
月此類曰文字之姿矣字面者對日月  
了共古風者風俗而弗天象故也譬則  
以對鵬對團子此類曰文句之情矣字

面者全不對了共蚌鵬者言斐粉之擗  
入則也此外隨字行之輕重而不離姿  
情之二事者多以郭公之一卷可知大  
和之凡例也初謂古聯句之法者不知  
為孰代誰人之提凡從五十韻至而韻  
然其今之聯句者長了則乏數韻確自  
有自己之愛要先者從二十四之短歌  
行用之十六之歌仙行而長其唯可限  
長歌行矣乎聞則五山之標式亦麼有  
歌仙聯之沙汰與所次謂去嫌之古式



者所謂地名人名氣植之類者都隔  
二聯同字者量字行之輕重而可隔十  
句元句共不曉其法其式之道理則如  
童部之習心經欲覺無的果今止將為  
大和之聯句亦者衣不替連飾之式分  
四折八面之表裏而可效四花八月之  
法式矣乎此故今之歌仙亦者以始中  
終咸折附止矣四十四麼五十韻麼效  
此例些爾有則曰連歌之漢和居曰能  
諧之和漢共成者可任其座之宗近厚

哉乍去擔行回華對類初予士麼偏參  
僧麼及著述而知平仄事者殆無所越  
聯句物唯從東冬至咸嚴遠知平色  
之韻字則上去入之之韻者有我不知  
而知之理果在有人者不及姿情之塩  
梅溪尋城南兮倭搜城西兮效韓孟以  
策之達者而眼儒書兮助佛經兮混尚  
覺切々之故事古語些知和訓漢音之  
可假用身於與松待之訣要則縱夫謂  
學向之果敢遣矣斯而知其學之用與

通用了則知詩歌有今日之優游知聯  
句有姿情之品而誠被謂和後之文人  
矣然則聯句之為用也識論語之所謂  
蒼鳥之名而謂為學文之始終矣夫

聯句歌仙行

郭公松獨立芋頭雙  
橋落簾離卦  
王炊新月芋  
始噫一驚山雀橋尼子  
杜若鶴雙橋尼子  
家榮調肺藏  
筆堀古風芋頭雙  
思之隱沢蛭芋頭雙

中  
沽諸茶宇袴  
園寺鷄無尾  
顧身浮竹佗  
衛士待油賣  
平家花將敵  
彼岸我團子芋頭雙  
身負常嚼老  
題源之位  
捧文梅早咲  
娘鑑照親園  
痛也木綿裏  
桂川猿有整  
濶渡淺茅荒  
代官停米商  
和氏螺先茸  
節供化蚌腸橋尼子  
口滑頓為倡  
式師又五郎  
先案竹初秣  
母衣韜武光

鳥藏三日月

鵲渡二星霜

終 鐘而向葛屨橘尾子

孟十益菊香平頭雙

白宮謔帚樣

仇厥惜鉅坊

日本治花幕

春初調柳相

註曰▲發端ノ一聯ハ全ク大和ノ新格ニテ郭ニハ和歌ノ情ヲ結  
杜若ハ俳諧ノ次ヲ示スニ様ハ凡雅ノ本懐ト云ハ本ヨリ漢家ノ  
制ヲ見ルニ生類ト植物ノ對ハ文法詩格ノ常ナルヲ何トテ中古ノ  
聯句ヨリ古人ノ法格ヲ失ケ然レ今ノ稱スル所ハ郭ニハ松ニ  
杜若ノ鶴ト當季ノ花鳥ヲ錯綜シテ郭杜公若ノ字意  
ヲ配リ独ニ雙ノ數量ヲ合セタルニ是ハ多ニ效トナリ

▲此聯ハ謎文ナリ離ハ板橋ノ中断ニ喩ハ肺ハ五臟ノ金ヲ貯フ

離ハ肺金ハ五行ノ意對ニシテ臟ト藏トハ通用ナカラ  
卦字ニ奇絶ノ對ト云ハ例ノ觀ハ杜若ニ橋ノ一字ヲ  
當セテ卦各ニ假橋ノ次ヲ見ヘキナリ

▲此聯ハ假對ナカラ凡月ニ大和ノ働ヲ稱スレ然レ古風量  
トハ論語ノ詞ニ安ヲ認タル儒者ノ養生ヲ笑ヘルナリ堀ノ  
一字ハ筆耕ノ語勢ヨリ當季ニ句作ノ働ト云ク炊堀ノ

意對ニ聯句ヲ尽セリト云ハ顧ハ方限者ノ月見ナリ  
此聯ハ俳諧ニシテ稱スル所ハ一ニト山山ノ字對ノ配ヲ見ル  
ヘキナリ 論語ニ季子文子之思ト云ルヨリ句情ハ通道  
ノ世ヲ隱シテ鱗ノ如ク穴居ストノ邦無道則隱氏云ル  
字毎ノ裁入ヲ稱スレ顧ハ机石ノ山雀龜ナリ

▲此聯ハ古語ノ裁入ナリ論語ニ東<sup>テ</sup>夏<sup>ニ</sup>賈<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>沽<sup>ニ</sup>諸<sup>ト</sup>アリ  
 對ハ小町カ侍ナリ幸都<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>少町ニ痛<sup>ク</sup>リ<sup>テ</sup>やふ小町を此<sup>レ</sup>  
 一<sup>レ</sup>ハ優女<sup>ト</sup>トアリテ首<sup>ニ</sup>衣<sup>ヲ</sup>掛<sup>タル</sup>食<sup>ノ</sup>程<sup>ヲ</sup>云<sup>フ</sup>リ  
 然<sup>レ</sup>ハ對ノ稱スル所ハ茶<sup>ノ</sup>今<sup>ト</sup>木綿<sup>ト</sup>ノ俗談<sup>ヲ</sup>用<sup>得</sup>テ觀<sup>ハ</sup>  
 但<sup>シ</sup>牽<sup>人</sup>躰<sup>ト</sup>見<sup>ル</sup>ヘ<sup>シ</sup>

▲此聯ハ一巻ノ奇絶ト云<sup>フ</sup>シ<sup>ト</sup>鷄<sup>傳</sup>ニ古歌<sup>ヲ</sup>播<sup>ク</sup>猿<sup>登</sup>ニ古  
 詩<sup>ヲ</sup>採<sup>ル</sup>増<sup>テ</sup>桂<sup>川</sup>ノ用<sup>ヲ</sup>評<sup>セ</sup>ハ歌仙<sup>ハ</sup>例<sup>ノ</sup>ニ花<sup>ニ</sup>月<sup>ナ</sup>ナ  
 或<sup>ハ</sup>見<sup>渡</sup>ニ月<sup>ヲ</sup>含<sup>タル</sup>桂<sup>ノ</sup>餘情<sup>ヲ</sup>稱<sup>ス</sup>ヘ<sup>シ</sup>去<sup>ハ</sup>各<sup>所</sup>ト云<sup>フ</sup>  
 人名<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>ト偏<sup>テ</sup>方<sup>ニ</sup>モ對<sup>ノ</sup>心得<sup>アリ</sup>テ蘭<sup>ト</sup>桂<sup>ト</sup>ハ絲<sup>ニ</sup>圭<sup>ニ</sup>ラ  
 對<sup>シ</sup>寺<sup>ト</sup>川<sup>ト</sup>ハ其<sup>各</sup>ノ寄<sup>ナリ</sup>聲<sup>ハ</sup>八<sup>箇</sup>寺<sup>ニ</sup>暖<sup>域</sup>ト對<sup>セ</sup>  
 ハ中古<sup>ノ</sup>庶<sup>子</sup>ト云<sup>フ</sup>キ<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>觀<sup>ハ</sup>小<sup>町</sup>ニ逢<sup>坂</sup>ノ蘭<sup>ナリ</sup>  
 ▲此聯ハ連歌ノ漢和<sup>ト</sup>モ云<sup>フ</sup>ハン<sup>ニ</sup>句<sup>共</sup>ニ詩歌<sup>ノ</sup>詞<sup>ヲ</sup>攝<sup>テ</sup>

觀<sup>ハ</sup>人<sup>望</sup>ノ限<sup>ナキ</sup>觀<sup>相</sup>ナリ此<sup>等</sup>ヲ聯<sup>句</sup>ノ地<sup>ト</sup>知<sup>ヘ</sup>シ

▲此聯ハ俳諧<sup>ニ</sup>テ衛<sup>士</sup>ノ由<sup>賣</sup>ヲ待<sup>夏</sup>ハ四<sup>式</sup>モ表<sup>テ</sup>皇<sup>居</sup>  
 ノ女<sup>流</sup>行<sup>様</sup>ヲ云<sup>フ</sup>ル例<sup>ニ</sup>前<sup>向</sup>ノ觀<sup>ナ</sup>カラ待<sup>ノ</sup>子<sup>ニ</sup>作者<sup>ヲ</sup>  
 稱<sup>ス</sup>ヘ<sup>シ</sup>本<sup>ヨリ</sup>衛<sup>士</sup>ト代<sup>官</sup>トハ官<sup>職</sup>ノ品<sup>ナ</sup>カラ字<sup>意</sup>ノ配<sup>ヲ</sup>  
 稱<sup>ス</sup>ヘ<sup>シ</sup>由<sup>ト</sup>米<sup>ト</sup>ノ附<sup>合</sup>ニ俳諧<sup>ノ</sup>笑<sup>言</sup>ヲ稱<sup>ス</sup>ヘ<sup>シ</sup>但<sup>シ</sup>  
 御<sup>辛</sup>貢<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>米<sup>ノ</sup>賣<sup>買</sup>停<sup>止</sup>ノ制<sup>札</sup>代<sup>官</sup>所<sup>ノ</sup>定<sup>法</sup>  
 ▲此聯ハ一轉<sup>シ</sup>テ是<sup>ヨリ</sup>二折<sup>ノ</sup>曲<sup>節</sup>ヲ云<sup>フ</sup>シ<sup>ト</sup>及<sup>ナリ</sup>平<sup>家</sup>三<sup>秋</sup>

申<sup>ハ</sup>中<sup>族</sup>ノ意<sup>對</sup>ニ<sup>テ</sup>花<sup>蝶</sup>ハ例<sup>ノ</sup>大<sup>和</sup>風<sup>ナリ</sup>去<sup>ハ</sup>佛<sup>幼</sup>徒<sup>ヲ</sup>  
 ヲ讚<sup>シ</sup>テ聲<sup>言</sup>ハ蝶<sup>ノ</sup>花<sup>香</sup>ヲ掌<sup>ル</sup>カ如<sup>ク</sup>生<sup>ハ</sup>其<sup>徒</sup>ニ個<sup>ヘ</sup>トモ  
 曾<sup>テ</sup>其<sup>跡</sup>ヲ見<sup>スト</sup>云<sup>フ</sup>ル遺<sup>教</sup>ノ意<sup>ヲ</sup>攝<sup>タル</sup>但<sup>シ</sup>代<sup>官</sup>ノ觀<sup>ニ</sup>  
 平<sup>家</sup>ノ裏<sup>ヘ</sup>ヲ附<sup>タル</sup>家<sup>語</sup>ニ苛<sup>政</sup>ノ諷<sup>詞</sup>ト知<sup>ヘ</sup>シ  
 ▲此聯ハ十成<sup>ノ</sup>俳諧<sup>ニ</sup>テ仏<sup>前</sup>ノ供<sup>物</sup>ニ泊<sup>ヲ</sup>置<sup>タル</sup>彼<sup>岸</sup>ノ

殊勝ヲ山明セナリ拜ノ子三作者ノ者破スレ彼岸ト即供  
ト八時候ノ對ナカラ多ハ團子ヲ彼岸ト云ク弟<sup>ナキ</sup>卷<sup>ノ</sup>即供  
ト云ハシカ知レ然ルニ團子ト鮮勝トハ此類ヲ指テ各字對  
ト云フ去ハ温飢粉ヲ撮入テ鮮ノ技身ニ似タルヨリ其各  
ヲ鮮腸汁ト云ル上ニ腸ノ詞トフ化ストハ雀化<sup>ス</sup>蛸ト云ル  
月令ノ詞ヲ假リテ糝ノ括<sup>カ</sup>回<sup>ヘ</sup>スルヲ雜<sup>チ</sup>煮<sup>キ</sup>ニスルモ独<sup>ニ</sup>法師ノ  
ト錦<sup>ト</sup>立<sup>テ</sup>ナラシ<sup>ク</sup>觀<sup>テ</sup>ハ例ノ教<sup>ナ</sup>カラ<sup>キ</sup>蝶<sup>ニ</sup>公<sup>前</sup>ノ飾<sup>ヲ</sup>見<sup>レ</sup>ル  
此類ハ前ノ負<sup>キ</sup>テ<sup>テ</sup>觀<sup>テ</sup>ハ躰<sup>ヲ</sup>削<sup>リ</sup>ノ地<sup>ト</sup>知<sup>レ</sup>嚙<sup>ム</sup>老<sup>ト</sup>和歌  
ノ詞ヲ摘<sup>ミ</sup>及<sup>ビ</sup>信<sup>ト</sup>ハ滑稽<sup>ノ</sup>辨<sup>利</sup>ナリ然<sup>レ</sup>ハ此<sup>ノ</sup>地<sup>ハ</sup>曲<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>  
會<sup>ニ</sup>取<sup>リ</sup>テ<sup>テ</sup>折<sup>ノ</sup>向<sup>ニ</sup>兩<sup>所</sup>モ有<sup>レ</sup>ル  
此類ハ滑稽<sup>ノ</sup>觀<sup>ナ</sup>カラ<sup>キ</sup>一<sup>卷</sup>ノ曲<sup>ノ</sup>節<sup>ト</sup>ヤ云<sup>ハ</sup>シ或<sup>レ</sup>日<sup>ノ</sup>啟<sup>上</sup>ノ  
戲<sup>ニ</sup>係<sup>ル</sup>位<sup>ヲ</sup>駢<sup>ト</sup>テ<sup>テ</sup>治<sup>リ</sup>テ<sup>テ</sup>鞭<sup>ハ</sup>火<sup>桶</sup>賴<sup>政</sup>ト云<sup>ル</sup>  
四品ノ題ヲ入テ一首ニ讀<sup>キ</sup>ヤノ仰<sup>テ</sup>蒙<sup>リ</sup>テ<sup>テ</sup>治<sup>リ</sup>川<sup>ノ</sup>の  
舟<sup>ノ</sup>のぬちくおほ<sup>キ</sup>氷<sup>ヲ</sup>魚<sup>ヲ</sup>けさ<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>や<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>  
ら<sup>し</sup>ト取<sup>ア</sup>ス讀<sup>メ</sup>リ<sup>ト</sup>は<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>竹<sup>ニ</sup>右<sup>ニ</sup>左<sup>ニ</sup>殿<sup>ハ</sup>進<sup>ノ</sup>の  
優<sup>式</sup>と<sup>ら</sup>れ<sup>ル</sup>衛<sup>士</sup>の又<sup>ハ</sup>記<sup>ト</sup>仰<sup>テ</sup>さ<sup>る</sup>る<sup>る</sup>と<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>  
此等<sup>ノ</sup>ラ<sup>ニ</sup>字<sup>對</sup>ノ奇<sup>絶</sup>ト稱<sup>ス</sup>レ  
此類ハ竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>詞<sup>ヨリ</sup>花<sup>枝</sup>ニ<sup>テ</sup>又<sup>ラ</sup>附<sup>ル</sup>ハ全<sup>ク</sup>禁<sup>庭</sup>ノ觀<sup>ニ</sup>  
ナリ然<sup>レ</sup>ニ<sup>テ</sup>文<sup>素</sup>ノ格<sup>ハ</sup>文<sup>彩</sup>ニ<sup>テ</sup>色<sup>字</sup>ノ假<sup>對</sup>ナ<sup>ラ</sup>枯<sup>地</sup>  
ノ素<sup>練</sup>ヲ<sup>依</sup>ニ<sup>テ</sup>意<sup>對</sup>ノ儻<sup>ヲ</sup>稱<sup>ス</sup>キ<sup>ヤ</sup>先<sup>素</sup>ノ<sup>ニ</sup>子<sup>ハ</sup>  
周<sup>禮</sup>ノ詞<sup>ヲ</sup>轉<sup>ス</sup>論<sup>詔</sup>ノ朱<sup>註</sup>ニ<sup>見</sup>合<sup>ス</sup>レ  
此類ハ全<sup>ク</sup>俳<sup>諧</sup>ニ<sup>テ</sup>娘<sup>鑑</sup>ニ<sup>母</sup>衣<sup>ノ</sup>附<sup>合</sup>ハ<sup>ニ</sup>字<sup>對</sup>ノ中<sup>ノ</sup>  
意<sup>對</sup>ト<sup>ヤ</sup>云<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>觀<sup>ニ</sup>鑑<sup>ノ</sup>一<sup>字</sup>ヲ<sup>寓</sup>テ<sup>テ</sup>親<sup>屬</sup>ハ<sup>古</sup>歌  
ノ裁<sup>入</sup>ナ<sup>リ</sup>親<sup>武</sup>園<sup>光</sup>ノ輕<sup>重</sup>ヨリ<sup>照</sup>鞞<sup>ノ</sup>字<sup>對</sup>ヲ<sup>稱</sup>ス<sup>レ</sup>

殊勝ヲ山明セナリ拜ノ子三作者ノ者破スレ彼岸ト即供  
ト八時候ノ對ナカラ多ハ團子ヲ彼岸ト云ク弟<sup>ナキ</sup>卷<sup>ノ</sup>即供  
ト云ハシカ知レ然ルニ團子ト鮮勝トハ此類ヲ指テ各字對  
ト云フ去ハ温飢粉ヲ撮入テ鮮ノ技身ニ似タルヨリ其各  
ヲ鮮腸汁ト云ル上ニ腸ノ詞トフ化ストハ雀化<sup>ス</sup>蛸ト云ル  
月令ノ詞ヲ假リテ糝ノ括<sup>カ</sup>回<sup>ヘ</sup>スルヲ雜<sup>チ</sup>煮<sup>キ</sup>ニスルモ独<sup>ニ</sup>法師ノ  
ト錦<sup>ト</sup>立<sup>テ</sup>ナラシ<sup>ク</sup>觀<sup>テ</sup>ハ例ノ教<sup>ナ</sup>カラ<sup>キ</sup>蝶<sup>ニ</sup>公<sup>前</sup>ノ飾<sup>ヲ</sup>見<sup>レ</sup>ル  
此類ハ前ノ負<sup>キ</sup>テ<sup>テ</sup>觀<sup>テ</sup>ハ躰<sup>ヲ</sup>削<sup>リ</sup>ノ地<sup>ト</sup>知<sup>レ</sup>嚙<sup>ム</sup>老<sup>ト</sup>和歌  
ノ詞ヲ摘<sup>ミ</sup>及<sup>ビ</sup>信<sup>ト</sup>ハ滑稽<sup>ノ</sup>辨<sup>利</sup>ナリ然<sup>レ</sup>ハ此<sup>ノ</sup>地<sup>ハ</sup>曲<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>  
會<sup>ニ</sup>取<sup>リ</sup>テ<sup>テ</sup>折<sup>ノ</sup>向<sup>ニ</sup>兩<sup>所</sup>モ有<sup>レ</sup>ル  
此類ハ滑稽<sup>ノ</sup>觀<sup>ナ</sup>カラ<sup>キ</sup>一<sup>卷</sup>ノ曲<sup>ノ</sup>節<sup>ト</sup>ヤ云<sup>ハ</sup>シ或<sup>レ</sup>日<sup>ノ</sup>啟<sup>上</sup>ノ  
戲<sup>ニ</sup>係<sup>ル</sup>位<sup>ヲ</sup>駢<sup>ト</sup>テ<sup>テ</sup>治<sup>リ</sup>テ<sup>テ</sup>鞭<sup>ハ</sup>火<sup>桶</sup>賴<sup>政</sup>ト云<sup>ル</sup>  
四品ノ題ヲ入テ一首ニ讀<sup>キ</sup>ヤノ仰<sup>テ</sup>蒙<sup>リ</sup>テ<sup>テ</sup>治<sup>リ</sup>川<sup>ノ</sup>の  
舟<sup>ノ</sup>のぬちくおほ<sup>キ</sup>氷<sup>ヲ</sup>魚<sup>ヲ</sup>けさ<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>や<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>  
ら<sup>し</sup>ト取<sup>ア</sup>ス讀<sup>メ</sup>リ<sup>ト</sup>は<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>竹<sup>ニ</sup>右<sup>ニ</sup>左<sup>ニ</sup>殿<sup>ハ</sup>進<sup>ノ</sup>の  
優<sup>式</sup>と<sup>ら</sup>れ<sup>ル</sup>衛<sup>士</sup>の又<sup>ハ</sup>記<sup>ト</sup>仰<sup>テ</sup>さ<sup>る</sup>る<sup>る</sup>と<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>  
此等<sup>ノ</sup>ラ<sup>ニ</sup>字<sup>對</sup>ノ奇<sup>絶</sup>ト稱<sup>ス</sup>レ  
此類ハ竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>詞<sup>ヨリ</sup>花<sup>枝</sup>ニ<sup>テ</sup>又<sup>ラ</sup>附<sup>ル</sup>ハ全<sup>ク</sup>禁<sup>庭</sup>ノ觀<sup>ニ</sup>  
ナリ然<sup>レ</sup>ニ<sup>テ</sup>文<sup>素</sup>ノ格<sup>ハ</sup>文<sup>彩</sup>ニ<sup>テ</sup>色<sup>字</sup>ノ假<sup>對</sup>ナ<sup>ラ</sup>枯<sup>地</sup>  
ノ素<sup>練</sup>ヲ<sup>依</sup>ニ<sup>テ</sup>意<sup>對</sup>ノ儻<sup>ヲ</sup>稱<sup>ス</sup>キ<sup>ヤ</sup>先<sup>素</sup>ノ<sup>ニ</sup>子<sup>ハ</sup>  
周<sup>禮</sup>ノ詞<sup>ヲ</sup>轉<sup>ス</sup>論<sup>詔</sup>ノ朱<sup>註</sup>ニ<sup>見</sup>合<sup>ス</sup>レ  
此類ハ全<sup>ク</sup>俳<sup>諧</sup>ニ<sup>テ</sup>娘<sup>鑑</sup>ニ<sup>母</sup>衣<sup>ノ</sup>附<sup>合</sup>ハ<sup>ニ</sup>字<sup>對</sup>ノ中<sup>ノ</sup>  
意<sup>對</sup>ト<sup>ヤ</sup>云<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>觀<sup>ニ</sup>鑑<sup>ノ</sup>一<sup>字</sup>ヲ<sup>寓</sup>テ<sup>テ</sup>親<sup>屬</sup>ハ<sup>古</sup>歌  
ノ裁<sup>入</sup>ナ<sup>リ</sup>親<sup>武</sup>園<sup>光</sup>ノ輕<sup>重</sup>ヨリ<sup>照</sup>鞞<sup>ノ</sup>字<sup>對</sup>ヲ<sup>稱</sup>ス<sup>レ</sup>

▲此聯ハ和後ヲ錯綜シテ別ニ格ノ備アリト云ハシ史記列傳  
 飛鳥<sup>キテ</sup>尽<sup>キテ</sup>良<sup>キテ</sup>蔵<sup>ト</sup>ハ韓信カ武功ヲ評シタレハ月ニハ  
 前ノ光<sup>ノ</sup>字ヲ顧テ聯句ニ附心ノ奇絶ト云シ増テヤ古語  
 ヲ翻轉シテ鳥ノ蔵<sup>ト</sup>ハ又<sup>ハ</sup>會<sup>ノ</sup>教<sup>ナリ</sup>物<sup>ヲ</sup>故<sup>ク</sup>又  
 ヲ俸<sup>リ</sup>古語ヲ摘<sup>ク</sup>又<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>備<sup>ニ</sup>效<sup>キナリ</sup>鶴<sup>ノ</sup>相<sup>ハ</sup>古歌<sup>ノ</sup>  
 蔵<sup>入</sup>ナリ但<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>星<sup>ノ</sup>如<sup>キ</sup>音訓ノ附合モ亦有<sup>レ</sup>  
 強<sup>テ</sup>二<sup>ノ</sup>星<sup>ト</sup>和<sup>訓</sup>スヤラス日<sup>ノ</sup>星<sup>ハ</sup>例<sup>ノ</sup>假<sup>對</sup>ナレナリ  
 ▲此聯ハ句作ノ奇絶ト云シ晨鐘ニ而<sup>ハ</sup>ハヲ殘シテ東白<sup>ト</sup>  
 様ヲ云<sup>ル</sup>ル<sup>ニ</sup>穩<sup>ハ</sup>橋<sup>ノ</sup>顧<sup>ナリ</sup>増<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>對<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>字<sup>ハ</sup>時<sup>深</sup>  
 切<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>平<sup>音</sup>ト成<sup>セル</sup>此<sup>ノ</sup>等<sup>ヲ</sup>聯<sup>句</sup>ノ<sup>イ</sup>覺<sup>ト</sup>答<sup>言</sup>レ<sup>但</sup>シ  
 且<sup>ハ</sup>花<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>盡<sup>香</sup>ト云<sup>ル</sup>古詩ノ詞ヲ轉シテカラ白<sup>ク</sup>且<sup>ハ</sup>二<sup>ノ</sup>字  
 ニ<sup>カ</sup>教<sup>ノ</sup>備<sup>ヲ</sup>拈<sup>ス</sup>レ

▲此聯ハ名殘曲節ニテ顧ハ所ノ遊宴ナリ四ニ好色<sup>ノ</sup>徒<sup>ノ</sup>  
 人<sup>ヲ</sup>第<sup>ト</sup>ト<sup>キ</sup>某<sup>ノ</sup>釵<sup>ト</sup>云<sup>ル</sup>ハ歌<sup>舞</sup>ノ地<sup>ノ</sup>風<sup>言</sup>ナリ源<sup>中</sup>ニ  
 白<sup>宮</sup>ナ<sup>ル</sup>様<sup>字</sup>ニ能<sup>倡</sup>ラ<sup>ズ</sup>ナ<sup>リ</sup>ト云<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>依<sup>殿</sup>ハ顧<sup>朝</sup>ナリ宮<sup>中</sup>  
 殿<sup>ノ</sup>字<sup>對</sup>ヲ拈<sup>ス</sup>レ<sup>運</sup>生<sup>坊</sup>ノ<sup>變</sup>ハ<sup>亦</sup>向<sup>答</sup>要<sup>美</sup>ニ<sup>更</sup>  
 ▲此聯ハ錄倉<sup>ヲ</sup>顧<sup>テ</sup>當時<sup>ニ</sup>平<sup>ノ</sup>結<sup>文</sup>ナ<sup>リ</sup>柳<sup>箱</sup>ハ<sup>礼</sup>思<sup>ニ</sup>  
 重<sup>ト</sup>羊<sup>ト</sup>ニ<sup>吉</sup>凶<sup>ノ</sup>沙<sup>汰</sup>アリ然<sup>ル</sup>ニ<sup>此</sup>對<sup>ヲ</sup>穿<sup>鑿</sup>セ<sup>ハ</sup>柳<sup>箱</sup>ハ  
 柳<sup>箱</sup>箱<sup>ニ</sup>テ<sup>依</sup>主<sup>ト</sup>自<sup>業</sup>ト<sup>ノ</sup>釈<sup>文</sup>ニ<sup>據</sup>ラ<sup>ハ</sup>花<sup>花</sup>ニ<sup>對</sup>ス  
 夕<sup>花</sup>暮<sup>ニ</sup>對<sup>セ</sup>子<sup>ト</sup>我<sup>行</sup>ノ<sup>排</sup>式<sup>ニ</sup>月<sup>花</sup>ノ<sup>句</sup>ハ<sup>指</sup>テ<sup>吟</sup>  
 セ<sup>ス</sup>一<sup>座</sup>ノ<sup>首</sup>尾<sup>ヲ</sup>先<sup>ト</sup>ス<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>ハ<sup>舉</sup>句<sup>ハ</sup>勿<sup>論</sup>ニ<sup>シ</sup>テ<sup>其</sup>日  
 其<sup>時</sup>ノ<sup>用</sup>ヲ<sup>知</sup>テ<sup>法</sup>ニ<sup>泥</sup>ヌ<sup>ラ</sup>時<sup>宜</sup>ト<sup>云</sup>ハ<sup>多</sup>ニ<sup>備</sup>諸<sup>ノ</sup>法<sup>ナ</sup>  
 ヲ<sup>知</sup>ラ<sup>ハ</sup>風<sup>雅</sup>ハ<sup>今</sup>日<sup>ノ</sup>優<sup>游</sup>ナ<sup>ル</sup>ヲ<sup>知</sup>レ<sup>ト</sup>フ  
 源<sup>云</sup>ハ<sup>一</sup>字<sup>ト</sup>モ<sup>名</sup>師<sup>ノ</sup>感<sup>ハ</sup>レ<sup>運</sup>テ<sup>レ</sup>ハ<sup>格</sup>ノ<sup>妙</sup>也<sup>ト</sup>云<sup>レ</sup>

け分の又様へ大和聯句の撰ふねいと打を福取の聯句  
とらくりりし聯句のいおねくも海と揚よりけねよ  
折こころと春句と對句をい入替れり草頭雙と  
運二の聯句をいして櫛尾子といねる春佳句をいり  
と實の尾和ふれいと作をいねるよ厚のふとよい。それ  
櫛の子とたつれいと狐し櫛尾も此通稱あり  
けんと春句より聯句の名ありしよとていさる錦といく  
るとも傳へし。實詞をま曲の文選の傳類へ  
す。一

○聯類

大小聯 並序

藤巴雀

聯とりりしに傍りてかあもしたるをば  
と趙柔の比北地お春らん横は方ちりと鶴とい  
望ももこと聯といひく仰南并野の尾殿と  
あ一野店山花の風流とふたりも中と経書の  
一對のほ又の一聯うと極しえりくた名の極し極し  
有し極しして聯といひあがり一はれし今世へ二牧  
よかきも一牧の極し一聯の語あんに二の二言が  
て又字七字あんにしも句を聯といひりきりまらぬ  
月次の大小と極め春と裏とん流しとれと大小類  
といひあぐの書面よりけきりつらぬの對此を意

一、  
題の二子ありとあり〜く大小の類此二子ありと  
あり〜摩訶と阿佉との梵語とあり〜下二胡粉  
とあり〜摩訶の大小と和しては後より二子あり  
はらりては不聯とあり〜とあり〜と又操の  
選物にけり〜に又選の連珠も又格にけり〜と  
操題よあげ〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜  
類とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜  
新格の蓄用と稱して〜又蓄舎のあり〜  
あり〜とあり〜とあり〜

摩訶

兼此也

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

阿佉

若菜摘宛堯于葛  
八十年先亦待春

○  
移と一〜油〜業、食の二字題と  
とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜  
麻とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜  
のあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜  
大やの二字とのあり〜とあり〜とあり〜とあり〜  
以、和のあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜



上文意の優海とある一漢連珠とを類類の一  
名也格と文意の隆士衛う文とある一今の序者  
武藤氏あり一尾の坪下とある一香田余とこれ  
ふはありとある

山口聯

おくと唇 さか あおむら 芭蕉老人

○漢文は香ののろ か 唐詩のこすちりおとちり  
芭蕉庵のたつとちりと洛のきき子とあむき  
屋柿舎の藤とあむと 一 担荷の一行おといて  
すおとせよとれちり

堪忍聯

字訓詩

張昇角

おはふと馬とゆれ 了場の標れとせよ  
んとんととてとれ 比の柳の氷とけはく

○評云此詩は字訓の格とありて一こと起語と列二四  
と措法とあり起るの語ありいけあやとれと  
大和の新格とあり一作者は文意序と各録あり

鑑亭聯

東花坊

山とちとれむととれちとれ

水と近うな月とるくはま

郭公のお  
時雨の白

そと澄き北あそいせ

うしと出の心電にあふ

そと澄き午の  
やううのせ

○浮く澄きと却の新浮よありて北七里ふふは  
ありきりにし時の言は行とさあし夜うえりて聯と  
あさりと東濃の野航うして柳雪をさ北は雪  
あういし聯のせよ二牧ありて百世の論もあ  
かんとこにそらと記さうののせ

五字聯

いふとや柑

孫まゝく睡しん

猪のたぐんれ

おと坊

○評云け聯と体中の念をさしありて素秋卒の筆解し聯  
きりしらすと先師の在子と傳 あういし人のあきし  
禅けの高きありていふ可く誤解されういし  
あういし一牧の聯とあさりあういしや禅室の序を後  
みして遠嶺の子僧と打殺とてしる命いし聯のい  
十師のいし一室と公頌の長

あういし







了ん様持しあそびえうありてへ川持しあそぶ道徳の  
以て命半人とあそびえうありてへ命半人の時へえ名とあそび  
皆そし天のあそびあそびて貴族命福とくめらるる  
しるしりきり

○註曰直道遊之字ハ在子ノ篇各ナリ逸註遊者心有天  
遊也云梅スルニ此序ハ車濃ノ事也又カ羽集ニ在子ノ各  
ヲ假テ四年ノ狩ヲ分ケ其一篇ノ序詞ナリ羽集上ノ羽集註  
ノ意ヲ運ヘテトクノ詩經ニ鳥飛反天魚躍例ノ列仙傳  
丁固字仙術也為白鶴也ハ祖統紀ニ觀音ノ美女ト化  
シテ馬郎婦ト成玉ヲ食アリ例ノ十九應身ナリ

○評云此序ハ分ク孫子ノ文也ナリて子本も然る也

一寓さし遊の一字と形容と一うて固く親善との心  
心さのうと孫子うさ地ううて子端の鼓舞といはれ也  
況や此等の道意ハ貴族命福の親おとさるる遊人  
の昔もとほもさるる例の孤諫とさるるて例ノ第中  
の月とあそびうて一撰者も文鑑ハ姓名ありてか例て  
祖又命ハまふて孫子の親おとさるる一う享保のうが  
あそびりて道ハ断絶の歎とほさるる也

二見文其臺繪序

張昇甫

五うけ二つの浦といせの園此ふもやそれとそむの  
面一守一て右うと名も流連とさるるたふもよる松

とかきりつとあがり人の気配とさきさきと我々のあつた  
 あきさきつとあつたさきさきとあつたあつたあつたあつた  
 のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 漁人の目とさきさきとあつたあつたあつたあつたあつた  
 いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 船板とさきさきとあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 てあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 くあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 さきさきとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

梅とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 はあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 らあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 氣弱とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 天下とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

○註句○あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた







く一後とゆらりしをばい△奉養茶と名づる八祖の歌言  
 たり十論法式下に出たり △殿封畧史三金毛九尾野狐  
 ありて姐已上化して國象ヲ乱せりト細奉ニ及ハス△古今集  
 序△秋のゆふ八咫田川ニあやみくみまをい帝の御内ニ臨み  
 んたひ△正のあしくよりゆふのゆくくと人たつらひし  
 とのこゝろむいゆききり △鳥玉ハ夜ト云く園ト云く枕詞ナリ  
 去ハシ眉墨ノ詞ニ寄セえ俳諧ノ微中ヲ稱スレ世等ハ句對ニ  
 似ズ凡是ヲ文對ト知キナリ △芋頭ヲ薯ト成シ芋露ヲ  
 薯ト成セル中古ノ檀林嘯ニ在リ物語ノ二字ノ起結ナリ  
 △嘯竹ト百題ノ用ナカラ嘯ノ一字ヲ夜寒ノ物結ト成セル  
 文ノ新續ヲ見キナリ

○海云けはらりと虹号のそとくをに一冊の授けの物

るるこゝと華くらと玉あつてもいぬ語くこまきと  
 つまきしつゝ一箇の絲もろふハ九尾ノ七尾の詞の富  
 けり四半子の化地のちりくけりまゝあまに能活  
 の月物活しつゝ一作者と名城年しつゝ能ヤの  
 七尾ノ伝とて者来よハ仲ヲ押さうり或と一鬼橋  
 しつゝヤチ中あうり一葉の能將とつゝ一

愛百合序 並詩

東乙文

我南水陸竹木之花者從梅也櫻之咲月  
 惜藤山吹之春而愛牡丹則思芍药居愛

第則思水仙歷在者如董大將之所慕  
手習之君愛情者不忌其面影則也于然  
牡丹者被生達魏姚之家而盛李唐之間  
也則居子之障子厭日居蒨繪之筆司儼  
露而玉妃麼覆湯上之面謝殆不耻千金  
之價乎徒是以通我朝止乎元祿之後者  
被麗而菊之名而牡丹者如有而無也  
增而不染此世之得蓮花之有仰嗅  
愛情者削之可識厚哉友在則所我鄉之  
捧菓子者離蓮幽之氣之古風而園植色

之百合而且培了夕誰了不作十二一室  
之襟矣共紅白自有品而如頭插了如居  
眼了隨風而有為彼地等向了者徒本謂  
以花之多矣相矣爾有則捧公之所好者和  
漢尋他教奇之色而彼方慕卓文君之前  
室居此方弄末摘花之假看要友有者所  
謂年月及經了共露不忘給弗其人之本  
情乎耶但者效或法師之物教奇而可謂  
玉色之有色隱者矣乎  
百合不誇蘭菊名自斬芴菜似傾城

假令君有美人竹

年為竹心含愛情

○註曰△愛蓮說水陸竹木之花可愛者甚多由は梅は  
 梅櫻より水仙に至る迄ハ其花ノ面影ニ寄セテ四季ノ愛情  
 シ書尺しセル發端ノ意味ヲ称ス之△源中ニ薰大將ノ浮舟ノ  
 行末ヲ慕元ハ姉君ノ面影似タハトノ手習君ハ浮舟ノ夏之  
 宇治十帖ニ散在セリ△西京雜記ニ花ノ奇者有痴黃魏紫  
 △李于唐ハ玄宗ノ比テ牡丹ニ千金ノ高買アリソ△長恨傳ニ  
 宗得貴妃跡温泉詔賜保室既出水射弱カ徹ス  
 不任羅綺之○京僧正シテまのそお此小くしと年々  
 りく行くとをとをとあさむく△史司事相如傳尺書車  
 騎買酒舍令文君當壚相如自着犢鼻禪滌酒器云

△源中ハ音尺ニ市橋ノ夏アリきわりのくえりひはくしあむ  
 心もあむとそりけりわとさむとあり梅ハニ対ハ和漢ニ  
 好色ノ他ナカラ壚トハ賣場ノ土電ニテ赤前堂ノ様ヲ云元假看  
 ト前堂ノ字對ハ更ニシテ和漢ニ文對ノ絶妙ト称ス△源中ハ鬢  
 々月をさしとめれあささるく又ハ月のおとさるの  
 とあり△兼好法師はれく竹ニハさしとくも色さのさしん  
 りのさしと玉の危のせとありん此をさしと梅ハニ結語ハ  
 玉危無當ト云元ヲ有色ト翻轉セシハ景畧モ互照玉例ノ  
 言ハス入ニ双關ノ絶妙ト称ス△美人竹ハ詠多し曾子固  
 詩註ニ厚娘自別其墓上竹人呼為美人竹云  
 ○源中ハ竹と例ノ虚誑あり愛のて子と形名とに  
 而して牡丹の富をも詠へるる各の各詞と情と

源中

源中



